巡検「鎌倉の海岸低地と元禄・大正関東地震」案内書

浪川幹夫（鎌倉歴史文化交流館）
萬年一剛（神奈川県温泉地学研究所）

■はじめに

昨年（2023〔令和 5〕年）は大正関東地震の発生から 100 周年にあたり、数多くの記念イベントが開催されました。大正関東地震のような歴史上の地震とそれに関係する諸現象の研究情報を交換する国内最大の組織として、「歴史地震研究会」があります。1984（昭和 59）年に発足したこの研究会の第 40 回大会が、小田原市の三の丸ホールで、小田原市および神奈川県の後援を受けて 2023（令和 5）年 9 月 1 日から 3 日まで開催されました。

神奈川県内に開催地が選ばれたのは、神奈川県にこの地震の震源があり、大きな被害をもたらしたためです。3 日午前中には、鎌倉市で津波被災地を回る巡検「鎌倉の海岸低地と 1703・1923 年関東地震」が開催されました。巡検とは、地質学や地理学の分野の、現地でおこなう検討や調査のことです。この巡検用に、案内書が作成されました。案内書は、最新の研究成果を盛り込んだものでしたが、今回、これに更に編集を加えてこの記事としました。これを参考にして、現地を訪れてくださると筆者としては望外の喜びです。

なお、この地域は住宅地ですので、現地を訪れる際は少人数で静かに見学する、私有地に立ち入らないよう十分注意するなど、生活環境の保全にくれぐれもご配慮ください。また、道路が狭いので交通の邪魔にならないようするとともに、交通事故に十分お気をつけ下さい。

ところで、関東地震という用語について、少し解説させてください。関東地震とは、関東で発生する地震、という意味ではなく、相模トラフで発生するマグニチュード 8 クラスの巨大地震を言います。一般には 1923（大正 12）年に発生した大正関東地震を関東地震と呼ぶ場合もありますが、同様の地震は繰り返し発生していると考えられているため、地震学の分野では 1923 年関東地震、あるいは大正関東地震と呼ぶことが多いです。大正関東地震の一つ前の関東地震は 1703 年に発生した元禄関東地震です。その前にも関東地震は起きたはずですが、歴史記録に大地震の記述はあるものの、その規模が正確にはわからないので、様々な議論があります（行谷、2024）。

■対象地の概要

この案内書で扱うのは鎌倉市の中央部を流れる滑川の左岸、材木座と、若宮大路沿いの一帯です（図 1）。

材木座は、砂丘の高まりを除けば、広い範囲が標高 4m 以下、低いところでは 3m を切るような海岸低地です。鎌倉を南北に流れる滑川も、現在は低地の西端、若宮大路側に押しつけられていますが、後述するように、かつてはこの低地を横切り、現在の河口よりも東側で相模湾に流れ込んでいました（南出、2004）。

斉藤（1999）は江戸初期の絵図や、地質柱状図から、この地域の標高 4m 以下の範囲に潟湖ともいうべき水域が広がっていたと主張しています。また、齋木（2004）は、材木座の滑川河口付近には遺物がみられないことなどから、潟か湿地状の地域が存在したと考えています。

この低地に住宅が建てられるようになったのは、大正関東地震前後に、周辺から運ばれた土砂で埋め立てられ、造成され、別荘地として分譲されてからです。その後、第二次世界大戦の空襲で被災した都市の出身者などが移住して、現在のような住宅地となりました。

この地域は、古刹が醸し出す伝統的な鎌倉の風格と、海岸特有の開放的な雰囲気が混じり合った、魅力的な住宅地ですが、津波災害には脆弱で、大正関東地震では津波被害を受けています。

一方、若宮大路は鎌倉のメインストリートですが、よくみると元禄・大正両関東地震の爪痕が残っており、地震や津波の規模感を偲ぶことが出来ます。なお、本記事の最後では、鎌倉の津波といえば必ず出てくる、大仏殿の津波による流失について、最近の研究に言及します。

■材木座海岸低地の地質

海岸低地とは、海岸から砂丘を隔てて陸側に発達する低地のことです。一般に、海岸低地は海だけでなく河川の影響も受けにくい、静穏な堆積環境が維持されるため、津波のような突発的なイベントによる堆積物が特徴的に残りやすいとされています。このため、鎌倉の海岸低地は津波堆積物調査の好適地と考えられ、2011（平成 23）年の東日本大震災をうけて神奈川県が系統的な掘削調査を行いました（Mannen et al.、

図１　本巡検案内書で巡る地点（背景は地理院地図）

2017）。この結果、同地は津波堆積物を保持するのに効果的な静穏で堆積が卓越する堆積環境ではなく、堆積と浸食が拮抗する河川や干潟が発達していたことが明らかとなりました。また、当初の目的であった津波堆積物も発見されませんでした。鎌倉地域は海岸低地とはいえ、津波堆積物が良く保持されている仙台平野のような沈降が卓越する低地ではなく、長期的にはほとんど地盤の昇降がないか、やや隆起傾向にあると考えられます（図２）。

しかし、この調査で得られた試料の詳しい年代測定からこの地域の地質発達史が明らかになりました。とくに重要な結果は、干潟堆積物の年代は古い順に、９世紀、13 世紀、近世（17 世紀頃以降）に集中するように見える点です（図３）。このことから、これらの時期に隆起イ

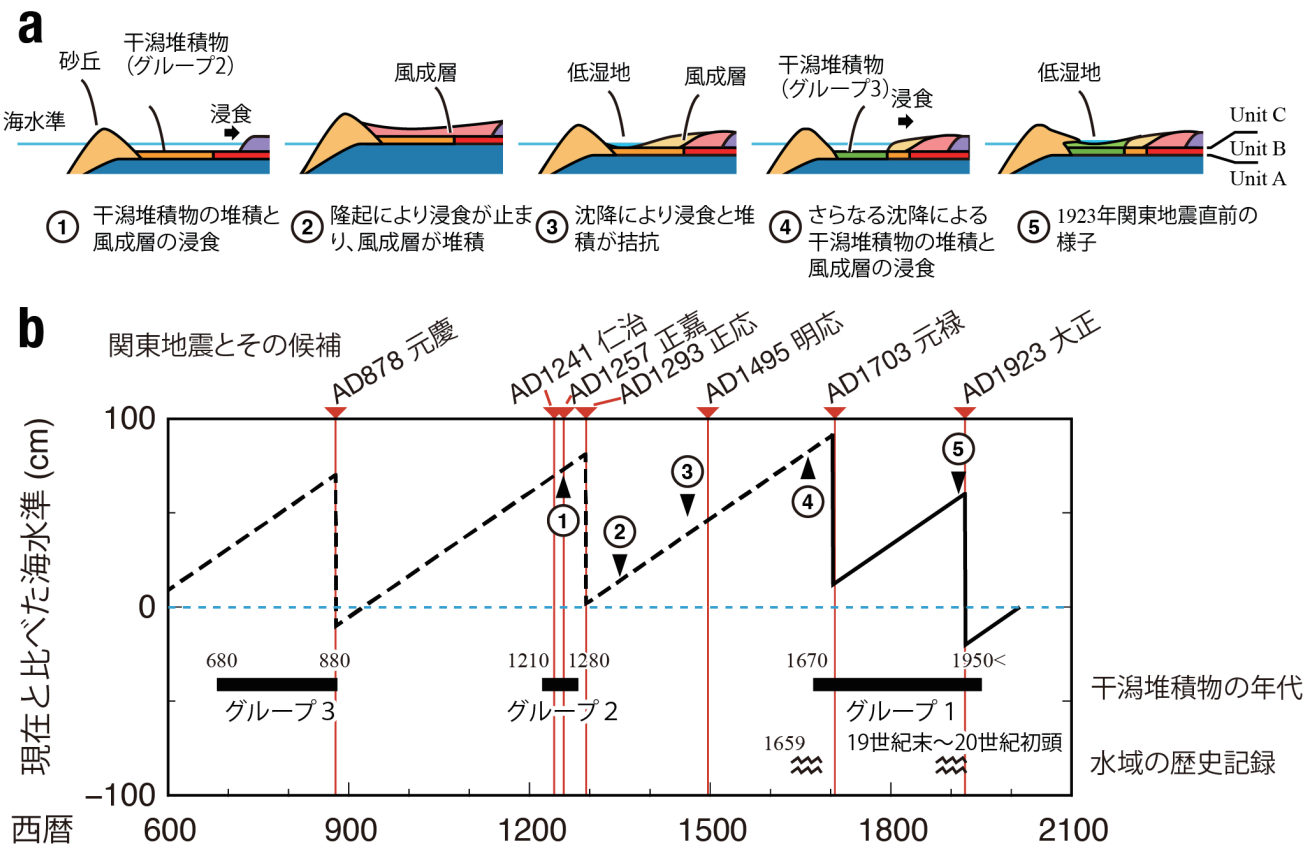

図 2　鎌倉及び逗子の海岸低地の発達プロセス（a）と隆起沈降モデル（b）　鎌倉の海岸低地は地震直後は隆起して砂丘が形成されるが、その後は沈降をするため浸食を受け、ついには干潟になり次の関東地震を迎えることを繰り返していたとみられる（a）。古記録から、この地域が水域であった時期は関東地震の直前であることがわかる（b）。

ベントがあり、干潟堆積物が離水して砂丘に埋没して保存されたと考えられます。この隆起イベントを引き起こしたものが関東地震と考えると、歴史地震の記録を参照してそれぞれ、878（元慶 2）年元慶地震、1257（正嘉元）年正嘉地震または 1293（大正 12）年正応地震、1703(元禄 16) 年元禄地震に対応すると考えられます。なお、干潟堆積物の炭素同位体年代 (^{14}C 年代) は、一般に関東地震とされている 1293（正応 6 / 永仁元）年正応地震よりも、1257（正嘉元）年正嘉地震に近接します。以上のような鎌倉海岸低地の発達プロセスと、隆起沈降モデルを図 2 に、調査で得られた ^{14}C 年代を図 3 に示しました。また図 4 に掘削柱状図を示しました。

■　若宮大路の地形

鎌倉では縄文期以降、東西に延びる砂丘が何列か形成されてきました（上本、2000）。鎌倉駅より南側でＪＲ横須賀線や江ノ電は周囲より若干高い所を走っていますが、これはそうした砂丘の高まりに沿っているからです。鶴岡八幡宮のすぐ前から続く若宮大路は、一の鳥居付近（図 1 Stop 8）が標高約 11m で最も高くなっていますが、これは砂丘の高まりにあたります。若宮大路は標高が比較的高いためにその全長でほぼ津波の被害を免れてきましたが、下馬付近（図 1 Stop 9）は標高約 4 mと低く、近くの滑川から溢れた津波で浸水した記録が散見されます。

Stop 1　光明寺

光明寺と内藤家

光明寺は浄土宗の関東総本山です（図 5）。寺伝によれば開山は然阿良忠（ねんなりょうちゅう）上人（1199 ～ 1287）、開基は鎌倉幕府第 4 代執権北条経時（つねとき）（1224 ～ 46）で、1240（仁治元）年佐介ヶ谷（さすけがやつ）に蓮華寺（れんげじ）として開創されたのち、1243（寛元元）年現在地に移り光明寺と改称されたといいます。江戸時代には徳川幕府の庇護のもと関東十八檀林（だんりん）の筆頭の学問寺として、また、譜代大名内藤家の菩提寺として繁栄しました。そのため同寺境内に接する南側には、同家歴代の墓所が広く現存します（鎌倉市、1979）。

内藤家関係施設における津波

内藤家に伝わる元禄 16 年 12 月『江戸状案詞』（明治大学博物館蔵）は、同家墓所での玉垣の崩落と石燈籠の全倒潰、石塔の損傷、同家書院の茶の間と台所の全潰のほか、同家

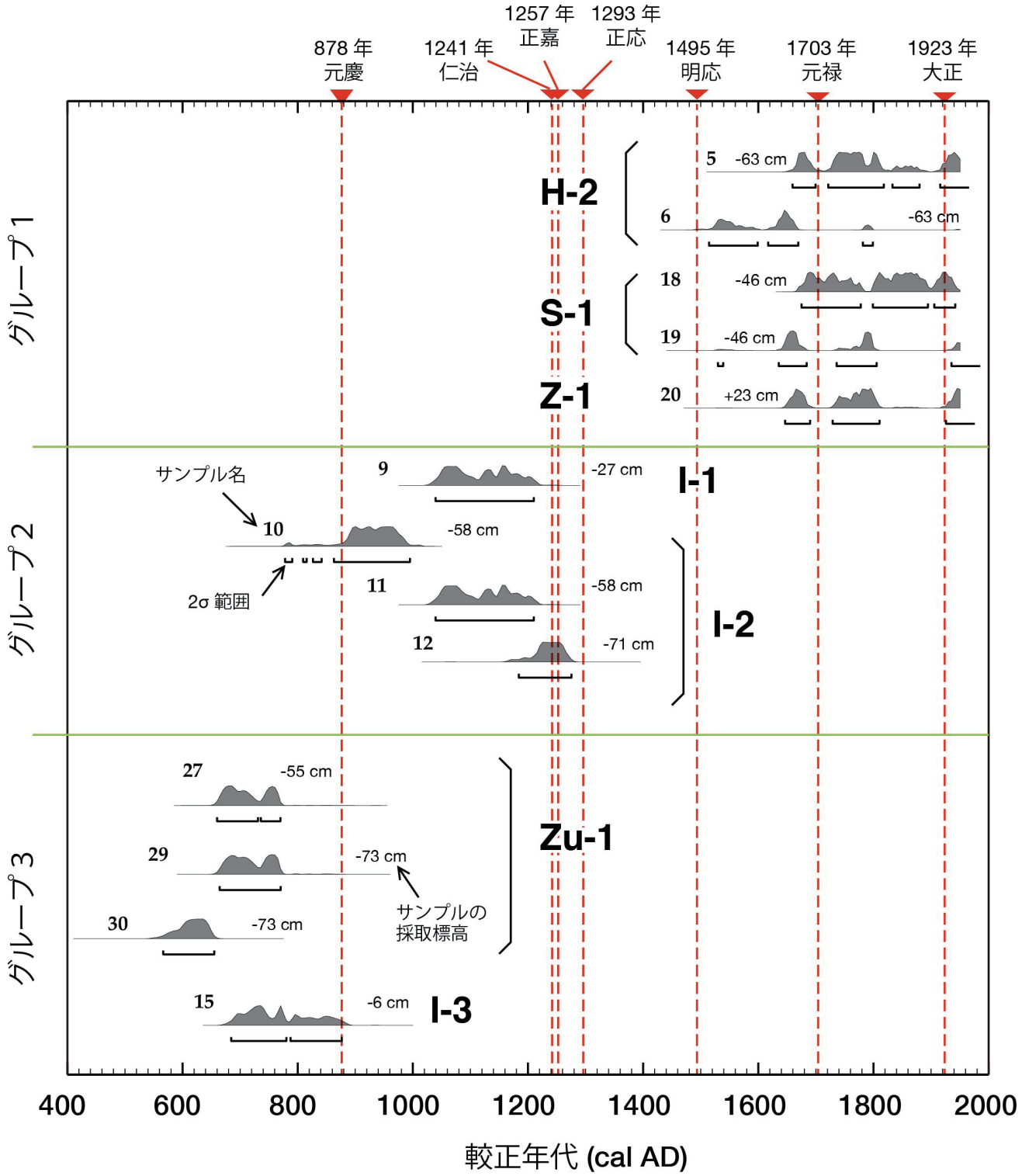

図 3　鎌倉及び逗子の海岸低地で得られた年代値（Mannen et al., 2017 を改変）　H-2, S-1 などの記号はボーリングの名称。ボーリングの柱状図とサンプル採取位置は図 4 を参照。一部のボーリングの場所は本文や地図中にでてきます。

「浜屋敷」で漁船が 2 艘津波で打ち上げられてそこの長屋を破壊したこと、「塩」（海水）が畳より 30㎝ほど上がったことを伝えています。ただし、光明寺の諸堂宇については、被害が軽微であったと記しています。

「浜屋敷」の位置については、古絵図などから推定することができます。まず、1685（貞享 2）年刊『新編鎌倉志』の「光明寺図」には「内藤忠興（ただおき）菩提所」の近くに御霊屋とその門と思える建物が描かれ（図 6）、1850（嘉永 3）年『光明寺境内図』（同寺蔵・図 7）には「内藤家霊屋」と書かれた同家墓所（現存）の西隣に「霊屋附畑」があります（浪川、2022）。そして、「霊屋附畑」のさらにその先の狭い畑地を過ぎると浜

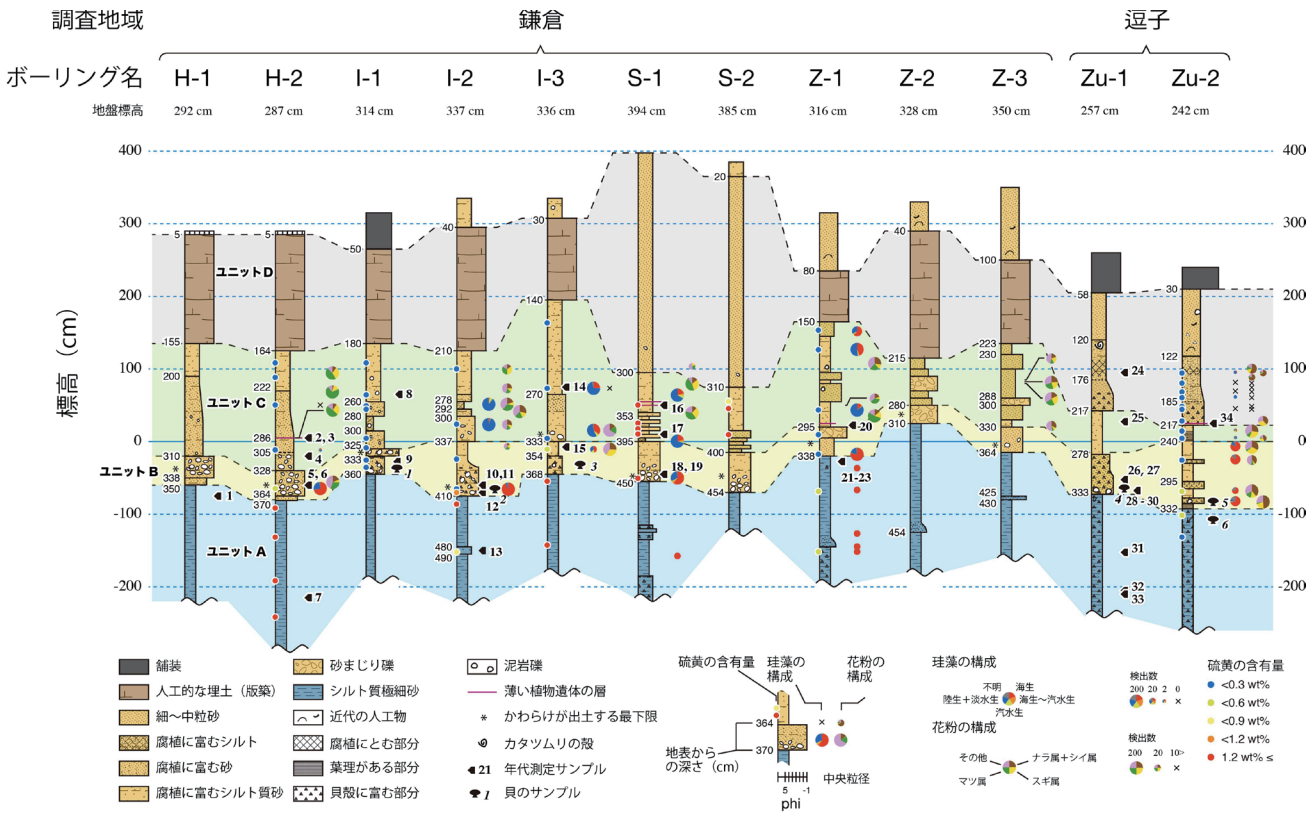

図４　鎌倉及び逗子の海岸低地で行われた掘削で得られた柱状図（Mannen et al., 2017 を改変）

図５　光明寺門前（奥は惣門）右側の看板の所が標高４m地点。大正関東地震では、この門の手前まで浸水した。

に面した石垣が廻っているので、「浜屋敷」が同寺境外にあったとすれば、おそらく図８に示した辺りになると考えられます（現在標高は 5.0 m）。

光明寺境内における津波

五摂家筆頭の近衛家当主、近衛基熙（もとひろ）（1648 〜 1722）の日記『基熙公記』には、元禄関東地震で光明寺に津波が入り、山々が崩落し、「こつ村」（おそらく小坪村）の切通が破損し、同地の民屋が全て津波にとられた、と書かれています。実際はどうだったのでしょうか。

現存する光明寺惣門（そうもん）は寛永年中（1624 〜 44）の再興といい、現本堂（大殿）は、1698（元禄 11）年の建築です（本堂の標高は約 8.5 m）。また、惣門は推定 1720（享保 5）年の『光明寺境内絵図』（図 9）に「学誉代廿六間引出修覆」（26 間＝約 47 m）と記されています（浪川、2022）。そこで、当時の津波浸水範囲を考えた場合、両建物は地震後も存続し現存している点を考慮すると、現在惣門が建つ地点から 47 m ほど奥が同寺における浸水域となります。ただし、その地点が現在の高さであったかは不明です。なお、大正地震の時、同寺では現惣門直前までが浸水域であり、そこの現在標高は約 4.0 mです（図 10）。

図６　光明寺図（部分）『新編鎌倉志』1685（貞享２）年刊より

以上から、同寺周辺における元禄の津波遡上高は、現在の標高の５〜６ mであったと思われます。

図 7　光明寺境内図（部分）1850（嘉永 3）年　光明寺

図 8　内藤家「浜屋敷」推定位置（赤丸。背景は地理院地図）

Stop 2　豆腐川

豆腐川での津波遡上

豆腐川の河口付近には豆腐川橋が架けられ、国道 134 号線が通っていますが、すぐ上流の小町大路から北側は暗渠になります（図 11）。暗渠になったのは昭和期で、大正関東地震の際はまだ開渠でした。

当時の経験者の談によると、材木座六丁目に所在した某家から光明寺側に 2、3 軒先の藁葺（わらぶき）屋根の農家が津波で横向きになり、道路を塞いだとのことです。そこで某家は津波では倒れなかったと伝わります。津波はその農家に激突したあと方向を一転して光明寺側に集中し、八百屋の「八百利」は浸水し、同店と、裏の畑には店にあった果物や野菜、缶詰類が浮いていたとのことです。そして、紅ヶ谷に通ずる豆腐川沿いの道路は大人の膝ぐらいまで浸水し、その海水が紅ヶ谷入口の正田家別荘を

図 9　光明寺境内絵図（部分・推定 1720〔享保 5〕年）光明寺

↑図 10　光明寺境内（画面右奥は惣門で、左は三門側である）惣門から 47 m 奥（三門近く）までが元禄地震による津波の浸水域と推定される。

←図 11　材木座側からみた豆腐川（撮影地点は図 12 参照）。道路から北（写真手前側）で川は暗渠となる。2023 年 5 月 5 日撮影。

過ぎました。その奥の、2、3 m程高い三井家別荘手前のゆるやかな上り坂あたりでは水は全く無かった、と伝わります（NAMAZU の会編、2017）。

海岸付近の被害について、鎌倉町編（1930）には、「河口付近にあった中島旅館は跡形もなく流失」とあります。以上の記述にある場所を図 12 に示します。

Stop 3　補陀洛寺（竜巻寺）

補陀洛寺（ふだらくじ）は、古義真言宗の寺で、本尊十一面観音像をはじめ、仏教彫刻を多数伝存しています（図 13）。寺伝によれば、開山は文覚（もんがく）上人、開基は源頼朝といい、同寺では古くから頼朝供養が行われていました。大正関東地震で建物が全潰し、大正 13 年に建て直されました。なお、たびたび竜巻に襲われたため、「竜巻寺」ともよばれています。

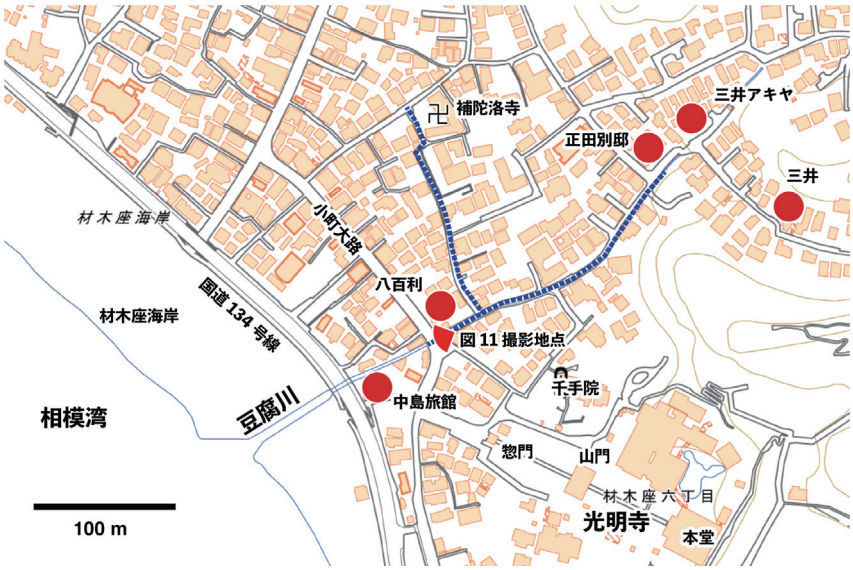

図 12 豆腐川流域の大正関東地震関連の記載地点　青い破線は豆腐川の暗渠。背景は地理院地図。

図 13　補陀洛寺の位置（図中央の丸。左は明治期の地図、右は現在の地理院地図）。補陀洛寺の南側は空き地（？）が広がっている（「今昔マップ」による：左図は明治 36 年測図・明治 39 年 10 月 21 日製版 2 万分の 1「鎌倉」）

図 14　地震で倒壊した補陀洛寺の建物　鎌倉市中央図書館　同寺門前まで津波は来たとの記録はあるが、写真では判然としない

羽鳥（1991）は、大正関東地震による津波で浸水したと報告しています。建物は地震で全潰した様子が写真に残っています（図 14）。豆腐川は材木座六丁目 14 の橋から北側が暗渠になりますが、マンホールを追跡すると暗渠、すなわち過去の川の流路をたどることができ、これをたどると補陀洛寺前に達します。補陀洛寺は内陸で、浸水は唐突な感じもしますが豆腐川を遡上した津波が同寺前まで到達したと解釈できます。また、同寺の北西側の道は、同寺の前で最も低いことが暗渠の水の流れでわかります。

鎌倉町編（1930）には、当時の経験談として、「第 2 震の直後大波が起り、砂浜を没し豆腐川に浸入したが害はなく急速に沖合まで引去った。その時、飯島の前の和賀江嶋が長く半島のように露出して異常な姿を呈し、約 20 分後黒煙のようなしぶきをあげて津波が襲来して砂浜を没して豆腐川を中心に付近一帯の人家を浸し岸壁を破壊した。そして、海水は補陀洛寺付近まで浸入した」などと書かれています。

Stop 4　円応寺旧跡

円応寺（えんのうじ）は臨済宗建長寺派の禅宗寺院で、現在は建長寺近く、小袋坂新道沿いにあります。しかし、かつては材木座の海辺にありました。『基熙公記』には「あらひ円応寺ゑんま堂大破いたし候」との記述があり、元禄地震の津波で大破したことが知られています（岩元、1973）。現在の場所にあるのは、被災後に移転したためです。

江戸時代前期の『相州鎌倉江之島図』（図 15）を見ると、同寺は閻魔川の西岸に位置していたことがわかります。閻魔川は、滑川のことです。しかし、滑川の河口は現在の位置とは異なり、1705（宝永 2）年「油

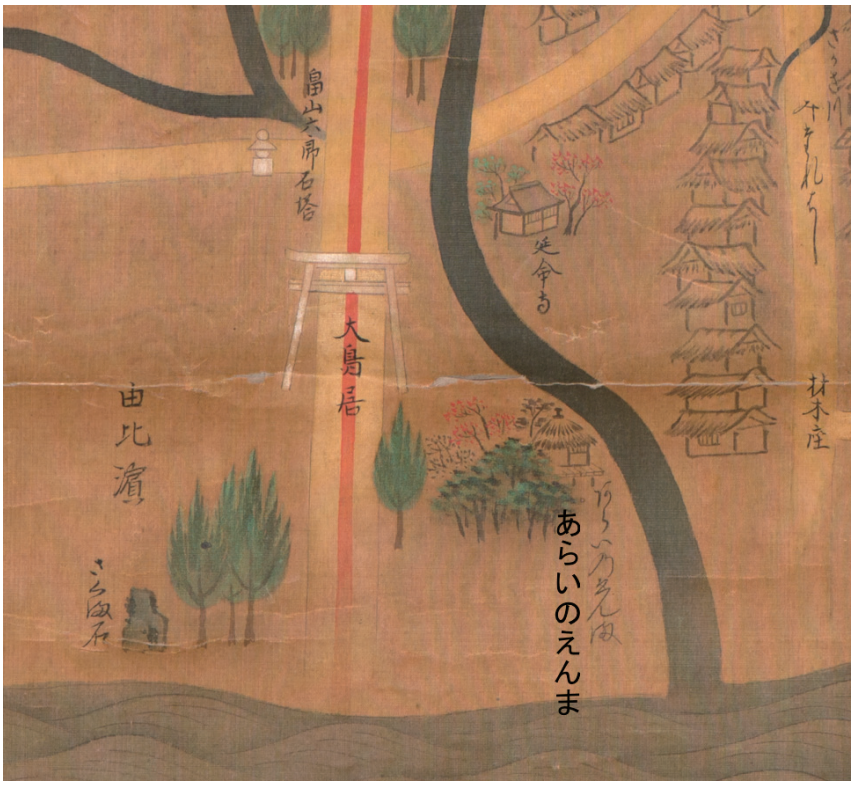

図 15 相州鎌倉江之島図（部分）江戸時代　鶴岡八幡宮

井浜間数之覚」には、「円魔川」（＝閻魔川）の河口が、大鳥居より海岸まで真っ直ぐ延長した地点から東へ「弐百拾間」（約 382 m）、光明寺の上り口から西へ「弐百六拾間」（約 473 m）のところと記しています。この記述から、南出（2004）は、当時の滑川の河口が現在の位置より東側に、350 ～ 400m 東にあったと推定しました。

円応寺の場所は、鎌倉町青年団の「荒居閻魔堂阯」碑が海岸通り沿いにありましたが、そこに比定された理由は判然としません。南出（2004）は、「黒田さん」のところが「円応寺跡とか円応寺畑」と呼ばれていた、「瓦のかけら」がちらばりいかにも寺院の跡のように見えたなどとする古老の話に基づき、過去の住宅

図 16 材木座村絵図（部分）　江戸時代　鎌倉市中央図書館

図 17 乱橋材木座絵図　（部分・地租改正時）

地図で「黒田国光」の大きな区画がみえる材木座五丁目 485 番あたりと推定しました。ところが、制作年未詳の『材木座村絵図』(図 16) には、海際と思える所に朱線で囲まれた部分があり、そこには「円応寺領 畑」や「元禄五年申三月 円応寺江寄附之地」のほかに「塚」「墓所」と表記があります。『相州鎌倉江之島図』（図 15）の「あらいのえんま」とある草庵や、旧公図（図 17）と併せると、同寺跡が所在したのは九品寺（くほんじ）の西側、現材木座三丁目 431 ～ 436 番と同五丁目 454 ～ 457 番・同 946 番の一部あたりであったと推定できます（図 18）。

なお、この推定地の現海抜高は 5.9 ～ 7.0 m ですが、2019（令和元）年に行われた発掘調査調査によれば、標高 3 m前後に近世の生活面か、「近世の耕作に関わる遺構」と推定されるものが検出されているので（斉藤建設、2020）、当時の地面は、現在の地表の 3 mほど地下にあることになります。かつてこの地にあった円応寺の標高も 3 mほどだったのかも知れません。滑川の河口が今の位置に移ったのは、絵図の解析から 1785（天明 5）年から 1871（明治 4）年の間のいつかと推定されていますが（浪川ほか、2019）、それ以上の詳しい時期や、河口が移動した理由はわかっていません。

Stop 5　旧勝田邸

神奈川県は 2012（平成 24）年に旧勝田邸（現いずみ保育園）で 3 本の掘削を行いました（図 19）。この掘削調査では、海面下 50 cm 付近に干潟堆積物が発見されました。この干潟堆積物に含まれる陸生の植物遺体の ^{14}C 年代分析から、この堆積物の形成年代は 2 本の掘削（I-1 および I-2）については 13 世紀頃、1 本の掘削（I-3）については 9 世紀頃と考えられました。この結果から、この付近は鎌倉時代まで干潟だったことがわかります。

また、これらの掘削では地表（標高 3.14 ～ 3.37 m）から標高 1.27 m ないし 1.96 cm までが版築（はんちく）と称される、泥岩の人為的な埋め土からなることがわかりました。ここの版築はおそらく、もともとは湿地だったこの地域が住宅地や別荘地として分譲される直前に、周辺の丘陵地から得られた泥岩を使って埋め立てた痕跡でしょう。逆に言うと、この地域は埋め立てるまで、標高が 2 m も無かったのです。

大正関東地震の際に発生した津波により、後述する海岸橋（Stop 7）で流された厨川白村は、この付近で「泥田のなかに顔だけ出して倒れて」声を上げているところを「植木屋の下職」に発見され掘り起こされたと伝わっています（厨川、1923）。現在、この周辺は住宅が建て込んでいますが、大正関東地震の発生時には、

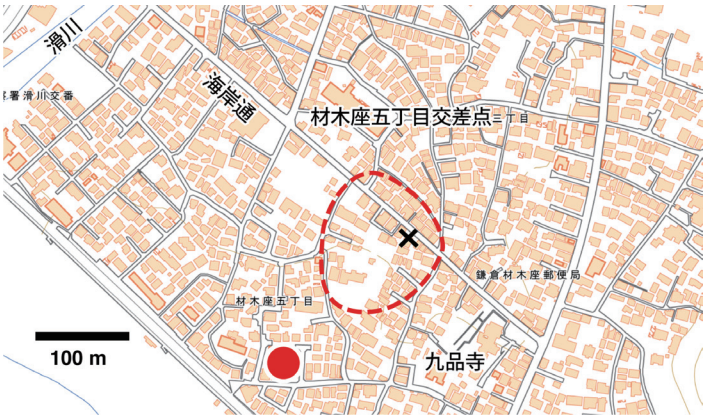

図 18 円応寺推定地　破線が今回、赤丸が南出 (2004) の推定。×は鎌倉町青年団の荒居閻魔堂阯碑（背景は地理院地図）

図 19　旧勝田邸の掘削位置（背景は地理院地図）

まだ埋め立てられていない泥田のような地域も残されていたのでしょう。海軍横須賀航空隊が 1923（大正 12）年 9 月 9 日に撮影した写真（図 20）では光る水面が左中程に見えます。鎌倉町編（1930）に、「海岸橋上方の低地から東方に進入した津波は勝田邸境まで及ぶ」との記載があり、滑川からあふれ出た津波がこの付近まで侵入したことがわかります。図 20 の光る水面はまだ排水されていない津波浸水と推定されます。

Stop 6　海岸橋

海岸橋付近では、滑川の西岸、海岸通りと若宮大路が交叉する「海岸橋の四つ角」（海岸橋交差点）に漁船が一艘打ち上がったとする記録があります（鎌倉町編、1930）。これは海岸橋付近で溢水した津波に乗った漁船が西岸に打ち上げられたものと考えられます。

海岸橋の東岸、材木座低地における地震直後の様子は、厨川蝶子が手記を残しています（厨川、1923）。これによると、材木座低地では、地

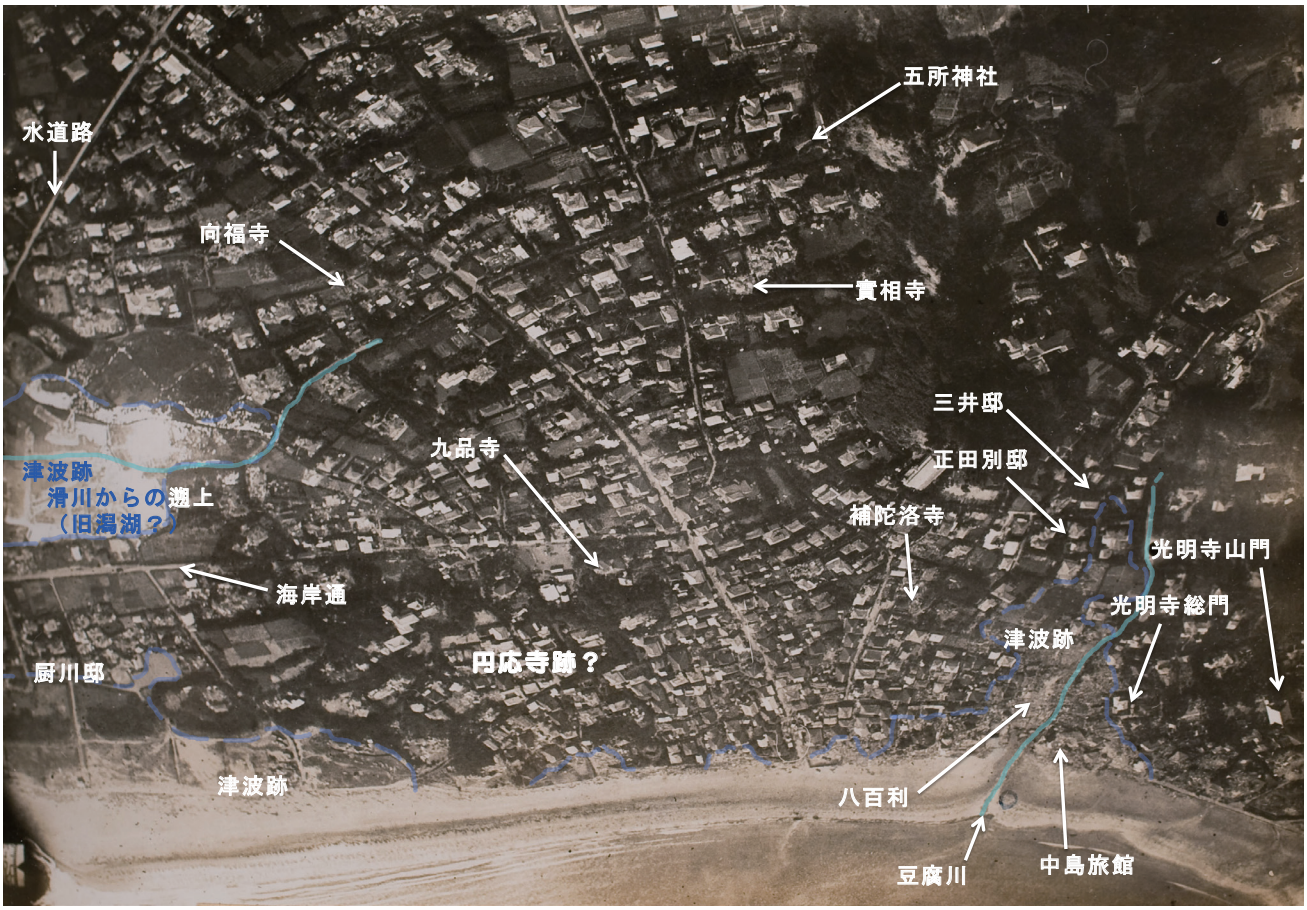

図 20　材木座付近の斜め航空写真とその読図　防衛省防衛研究所　写真の上下を逆にしている。

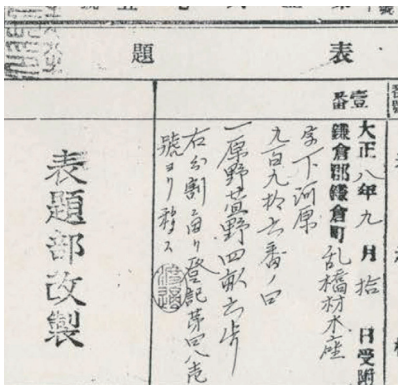

図 21　厨川邸の登記簿表題部　大正 8 年に原野萱野であったことがわかる。

震のあと、人々が外に出て広場に集まってきましたが、周辺で火事が起きはじめたことなどから、海岸橋をわたって右岸の高台に逃げることになったようです。蝶子と夫の白村も、これについていきましたが、海岸橋に到達したところで津波に呑まれてしまいました。当時の海岸橋は木造で、大水や高潮で容易に壊されるため、橋の周りには針金が巡らされて橋の部材が遠くまで流されないようにして、すぐに再建できるような工夫がされていたようです。蝶子は、津波に襲われはしたものの、この針金に引っかかったことが手記から窺えます（本節末尾に当該部分の抜粋を掲出しました）。一方、白村は前述の通り、勝田邸付近まで流されて救出されたものの翌２日に亡くなりました。避難をした厨川夫妻は被災しましたが、厨川邸は無傷で、戦後も残りました（津村、1956）。

ところで、登記簿によると、厨川邸のあった場所は、もともと「原野萱野」で、何回かの所有者変更を経て、蝶子が震災の直前に購入したことがわかりました（図 21）。地形図（図 22）を見ても、大正時代に原野であったらしいことが確認できます。

厨川邸の北西約 50 m のところで行われた神奈川県の掘削（S-1 および S-2；図 23）では、地表（標高 4m）から標高 1m ほどが砂丘、それ以深は河川性の堆積物（Unit C）、海面下 50cm 前後で干潟堆積物（Unit B）、それ以深で縄文期の内湾性堆積物という地層の重なりが確認できました（図 4）。干潟堆積物の ^{14}C 年代は江戸期以降を示しました（図 3）。つまり、江戸時代にこの付近は干潟だったのです。掘削時、近傍にあった邸宅（現存せず）は大正関東地震前の建築でしたので、江戸期以降に 4m も河川堆積物や砂丘が積み重なったことがわかります。

厨川蝶子著「哀しき追懐」より抜粋

二十間たらずの道を恁（こ）うして引きずるやうにして滑川の橋を駆け抜けようとしました。恰度（ちょうど）その橋の中央

図 22　現在 (右) と大正 10 年測図 (左) の地形図による厨川邸および勝田邸
大正 10 年の地形図では、両邸のまわりに原野が広がっているように見える。画像は今昔マップを利用。

図 23　海岸橋、厨川邸跡地および掘削地点（背景は地理院地図）

ほどまで来た瞬間です。川の下流から真黒なものが山のやうに押して来るのをちらとみました。墨よりも黒い巨濤（おおなみ）が日を蔽（お）うて聳立（そそりた）つてくるのです。海嘯！　と思う刹那に眼の前が暗くなつて、私の肩に縋った主人が後になつて、橋を渡りきらうとしたその時早く、あッといふ聲も立てずに私は意識を失つてしまひました。

それは死とも生とも考える暇もない一刹那の出来事でした。人事不省のままで居る間にどれだけの時が経ったことでせう。我れに復（かえ）つた私は、濁流に押されながら河岸の壊れた石垣や棒杭の間に身體を支えられているのです。岸に匍（は）ひあがらうとしても手足が動かせません。全身は鐵縛（かなしば）りにされたやうで自由が利かないのを夢ではないかと疑ひましたが、漸く意識が明瞭になつてくると、棘のある針金で幾重にも自分の身體が巻き付けられているのに気がつきました。（中略）針金は、石垣にも堤防にも、またよく出水ごとに流される橋ですから、橋から棒杭などにも引き渡されていたので、海嘯で切られながら、それが水の渦巻く勢いにつれて自然と私の身体を巻いたものかと思われます。私はその針金を漸くといてびしよぬれのまま壊れた岸の上へ這い出ました（略）

図 24　由比ガ浜二丁目の発掘現場で検出されたイベント堆積物（2012 年 2 月 8 日撮影）　手前の斜面はイベント堆積物でできている。中央のトレンチではイベント堆積物（やや色が濃くて礫を含んでいる地層）とその下位の砂丘砂層が見える。

Stop 7　若宮ハイツ周辺

鎌倉で大正関東地震を体験した人々の手記からは、若宮大路沿いのマンション、若宮ハイツ（由比ガ浜二丁目）の付近で津波が川から溢れたとする証言が散見されます。しかし、若宮ハイツのある滑川右岸はかなり標高が高く、ここを津波が超えたというのは考えにくいです。一方、滑川を挟んだ左岸側はかなり低いため、上のような証言は大正関東地震の津波はこの付近で左岸側の低地に溢れ出したことを指しているものと考えられます。

右岸は滑川を遡上する津波の攻撃斜面となったと考えられますが、この攻撃斜面上では興味深い堆積物（イベント堆積物）が発見・記載されています。若宮ハイツのすぐ南の滑川河岸で、2012（平成 24）年に行われた発掘調査で 14 ～ 15 世紀ごろの砂丘（含まれるヒダリマキマイマイの殻の ^{14}C 年代）斜面上、明治以降の瓦礫堆積物の下位で見つかった、砂を主体とするものの大量の礫を含む堆積物がそれです（図 24）。この堆積物を人為的なものを起源とする斜面上の堆積物とする考え方もありますが（上本ほか、2013）、含まれる礫の向きが滑川を遡上する流向に一致することや、こ

図 25　震災直後（左）と現在（右）の一の鳥居　左の写真は鎌倉市中央図書館　右の写真（2023 年 5 月 5 日撮影）の矢印は、鳥居が折れた痕跡。

の堆積物中に水域に生息する介形虫（1mm 程度の甲殻類）の化石が含まれることなどから、松島ほか（2018）は津波堆積物と考え、^{14}C 年代から元禄関東地震の津波が作った堆積物と判断しました。大正関東地震でもこの地域は津波に襲われていますが、この堆積物が浸食されずに残ったのは、明治以降の瓦礫堆積物が被っていたためと考えられています。

Stop 8　一の鳥居

一の鳥居 (図 25) は、現重要文化財。現在の岡山市犬島で採石された犬島花崗岩でできており、1668（寛文 8）年に建設されましたが、大正関東地震で上半分が倒壊しました（図 25 左）。現在目にすることができるのは 1936（昭和 11）年に修復・再建されたためですが、よく見ると柱が割れています（図 25 右）。これは倒壊の痕跡です。

この鳥居は元禄関東地震でも被害を受けていたことが、『基熙公記』の「由井の浜大鳥井（居）破損、二の鳥井まで津波入申候、あら井円応寺ゑんま堂大破いたし候、光明寺津波入」という記述から推定できます。ここの、浜の大鳥居は一の鳥居のことと解釈できるからです。

なお、現在の一の鳥居が建つ前にも大きな鳥居があったようです。後述する『梅花無尽蔵（ばいかむじんぞう）』の著者、万里集九（ばんりしゅうく）(還俗（げんぞく）者；1428 ～？) がみた鳥居は『快元僧都記（かいげんそうずき）』にある「浜鳥居」で、鎌倉女学院前交差点付近の発掘調査により見つかっています（図 26）。若宮大路西側の歩道には、それを記念する碑とモニュメントがあります。

Stop 9　下馬交差点

若宮大路の下馬（げば）交差点から大町方面に向かうとすぐに滑川を渡る延命寺橋にでます。この橋の名前の由来

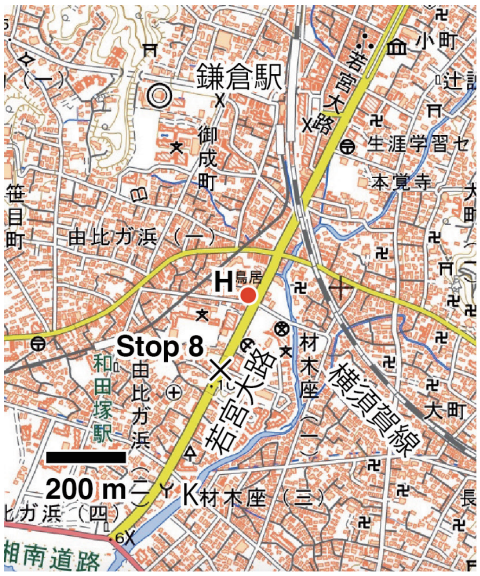

図 26 浜鳥居の検出地点（左）と検出状況（右；史跡若宮大路遺跡発掘調査団 , 1991）　左図Hの赤丸が検出地点　背景は地理院地図

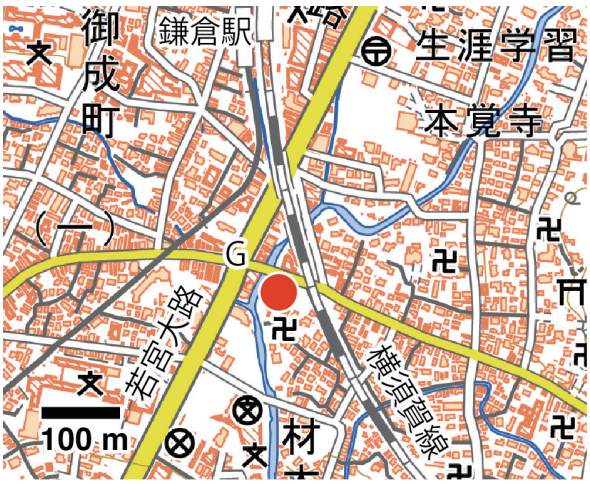

図 27 井上敏夫邸の場所（左）と震災前の様子　左図赤丸が井上邸、Gが下馬交差点。背景は地理院地図。

となった浄土宗の延命寺が横須賀線の踏切の手前にあります。地震当時、同寺の近くに海軍軍人井上敏夫の邸宅がありました（図 27）。井上氏の親族によれば、同氏の邸宅は地震で倒壊し、その妻が建物の部材の下敷きになって身動きがとれなりました。しかし、幸いなことに、川を遡上した津波によって建材が浮き上がったため、妻は脱出することができて一命を取り留めた、とのことです。この話しから、この付近（標高 6 m）でも滑川を遡上した津波が、溢水したことが判明しました。

Stop 10　鎌倉駅前（二の鳥居・段葛南端）

羽鳥（1991）は元禄関東地震の津波は滑川を遡上し、延命寺付近で溢れて下馬交差点を浸水し、さらに二の鳥居付近まで遡上したとしました。一方、大正関東地震の津波は、延命寺橋まで到達したと言われていますが、延命寺橋が浸水したかどうかは曖昧で、下馬交差点側の浸水もよくわからない、としました。しかし、先に述べたとおり延命寺近くの井上邸では津波の到達が明らかな証言が得られました。

ちなみに、羽鳥（1991）では明応年間の津波に関しても、規模を考察しています。この考察では、成立年不明の武家年表である『鎌倉大日記』の「鎌倉由比浜海水到千度檀」という記述と、山本（1989）が千度壇の南端を下馬交差点に比定していることを併せて、浸水域を現在の下馬交差点までと考えました。

追補　大仏殿の堂舎屋を破る

『鎌倉大日記』には、1369（応安２）年の項に「大仏殿転倒」との記述があります。また、万里集九が書いた『梅花無尽蔵』は、実際に足を運んだ各地の様子を記した中世の重要文献のひとつで信頼性が高い文献とされていますが、そこには 1486(文明 18) 年に大仏殿はすでに無く大仏が露座であったことが述べられています。つまり、それより年代が下る明応年間には、大仏殿は無かったと考えられます。それでは、よく知られる明応４年の津波（1495 年９月３日）によって大仏殿が流されたとも読める『鎌倉大日記』の記述「水勢大仏殿破堂舎屋」はどう考えたら良いのでしょうか。ここでは明応年間の「大仏殿」が何を指すのか、という視点で検討してみたいと思います。

鎌倉の報恩寺（今は廃寺）の開山義堂周信（1325 ～ 88）の詩文「相之大仏寺ニ宿ス」には、「相の大仏寺に宿す　義堂　早歳（若い歳）曽て遊びて甲子（の日〔吉日〕）頻なり。（中略）寺は海岸に瀕して松を吹くこと激し。潮は灘沙を退て月を送ること長し」とあります（『新編鎌倉志』巻五「○大仏附切通」所収）。この「寺は海岸に瀕して」なる記述から「相之大仏寺」の境内は、師が鎌倉に住んでいた 1359（延文 4）年から 1379（康暦元）年の頃、海岸近くまであったと解釈できます。

それでは、大仏寺が何を指すのでしょうか。『三嶋神社文書』の 1397（応永 4）年 9 月 9 日「伊豆守護代（寺尾憲清）奉書」に「大仏寺雑掌」、同社文書の同 5 年閏 4 月 28 日「鎌倉公方（足利氏満）御教書」に「鎌倉大仏寺」と記されています。このことから、中世における「大仏殿」は、寺院境内として「大仏寺」「鎌倉大仏寺」とも称されていたように読めます。こうしたことを念頭に、「水勢大仏殿破堂舎屋」を読むと、「大仏寺」などと呼ばれた寺院境内の、いずれかの建物が流されたと解釈しても、よいかも知れません。大仏のある地盤の標高は 14m もあり、また 2000・2001（平成 12・13）年度に実施した発掘調査によって確認された大仏殿の標高は 13 m でしたので、川の遡上で二の鳥居（標高 5.9m）まで達したとされる元禄関東地震での津波や、大正関東地震にみる、延命寺付近の住宅（標高 4.3

m）をようやく浸水させる程度の津波が襲うにしては高すぎます。大仏寺に関連する海岸付近の堂舎屋が津波で破られた、というのが『鎌倉大日記』の記述の無理のない解釈と考えます。

参考文献

羽鳥徳太郎 ,1991, 鎌倉における明応 (1498)・元禄 (1703)・大正 (1923) 津波の浸水域 , 歴史地震 ,7,1-10pp

岩元由美子 ,1973.9, 円応寺について , 鎌倉 ,21, 鎌倉文化研究会 , 28-39pp

石橋克彦 ,1980, 東海地震の長期的予測に関するコメント , 地震予知研究シンポジウム (1980),123-125pp, 石橋克彦の歴史地震研究のページ http://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/1980EPRsymp.pdf

鎌倉市 ,1979, 光明寺 , 鎌倉市史 , 社寺編 , 吉川弘文館 ,429-433pp

鎌倉市教育委員会 ,2000, 国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書 X, 公共下水道 (汚水) 築造工事 (中間バイパス幹線埋設) に伴う立会い調査 ,18pp

鎌倉市教育委員会 ,2006, 史跡若宮大路保存管理計画策定報告書 ,77pp

鎌倉町編 ,1930, 鎌倉震災誌 , 鎌倉町役場 , 国立国会図書館デジタルコレクション ,79-111pp https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1464097

厨川蝶子 ,1923, 悲しき追懐―厨川白村博士の死―, 女性 ,4(5), プラトン社 ,117-138.

松島義章・萬年一剛・千葉崇・野村律夫・田中源吾・宮田眞・滝澤晶子・山口麻衣・鈴木茂・遠藤邦彦 ,2018, 神奈川県鎌倉市で発見された江戸期の特異な堆積物～津波が関与した可能性の検討～ , 歴史地震 ,33,167-186pp.

萬年一剛・五島朋子・浜川幹夫 ,2013, 神奈川県逗子市 , 鎌倉市, 藤沢市における 1923 年大正関東地震による津波～新資料と国土地理院 DEM に基づく再検討～ , 歴史地震 ,28,71-84pp

Mannen, K., Kim, H. Y., Suzuki, S., Matsushima, Y., Ota, Y., Kain, C. L., Goff, J., 2018, History of ancient megathrust earthquakes beneath metropolitan Tokyo inferred from coastal lowland deposits, Sedimentary Geology, 364, 258-275pp

南出眞助 , 2004, 鎌倉滑川河道の再検討, 国立民俗博物館研究報告 , 118, 25-41.

基熙公記 , 国文学研究資料館 , 新日本古典籍総合データベース , コレクション , 宮内庁書陵部 書陵部蔵マイクロデジタル変換 256・257 コマ〔原典より〕p4547 ～ 4549 コマ http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100249255/viewer/4549

NAMAZU の会編 ,2017, 新編 鎌倉震災志 , 冬花社 ,188-189pp

行谷佑一 , 2024, 相模湾周辺における津波史料と地質痕跡から推定される歴史時代の相模トラフプレート間地震 , 地震 , 76, 337-365.

浜川幹夫 ,2014, 鎌倉における明応年間の「津波」について , 歴史地震 ,29,209-219pp http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/kaishi_29/HE29_209_219_Namikawa.pdf

浜川幹夫 ,2022, 光明寺境内諸堂宇の変遷 , 記主禅師研究所紀要 ,5, 記主禅師研究所 ,99-140pp

浜川幹夫・平田恵美・辻亜紀・萬年一剛 , 2019, 鎌倉における過去の津波について , 鎌倉市教育委員会文化財部調査研究紀要 , 1, 35-52.

齋木秀雄 ,2004, 出土遺物からみる鎌倉の開発 鎌倉時代前半を中心に , 国立歴史民俗博物館研究報告 ,118, 43-57pp

斉藤建設 ,2020, 神奈川県鎌倉市・材木座町屋遺跡（№261）発掘調査報告書―材木座五丁目 946 番 1 地点― ,111-113pp

斉藤直子 ,1999.3,13-19 世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容 , 国立歴史民俗博物館研究報告 ,81,115-128pp

史跡若宮大路遺跡発掘調査団, 1991, 神奈川県鎌倉市 国指定史跡 若宮大路遺跡発掘調査報告書Ⅴ―主要地方道路横浜鎌倉線史跡若宮大路修景計画に伴う遺跡発掘調査―, 2-60

津村雄 ,1956, 鎌倉文学散歩厨川白村 , 昭和 31 年 2 月 1 日鎌倉タイムス：木村彦三郎「鎌倉記憶帳」所収.

上本進二 , 2004, 鎌倉の地形発達史, 国立民俗博物館研究報告 , 118, 7-16.

上本進二・上杉陽・細野衛・近藤敏 , 2013, 鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡 No.372 の特殊堆積土層の諸特徴 , 関東の四紀 ,33,19-43pp

山本武夫 ,1989, 明応七年 (一四九八) の海洋地震―伊豆以東における諸状況 , 古地震続 実像と虚像 , 東京大学出版会 ,343-364pp